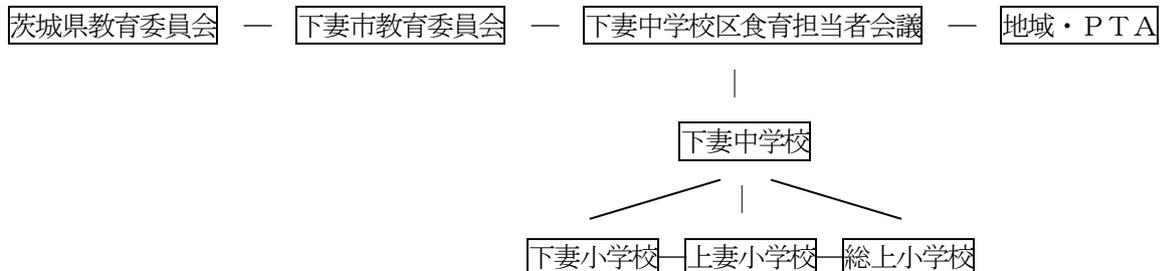


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	茨城県
推進地域名	下妻市(下妻中学校区)

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 食育の効果を高めるための学校・家庭・地域の連携の在り方の研究

1 下妻中学校区食育担当者会議の設置

- ・第1回 5月21日(木)
- ・第2回 7月15日(水)

実践中心校・実践協力校の校長，給食主任，養護教諭と各学校のPTA会長，農政課，健センター管理栄養士，食生活改善推進員，教育委員会が本事業の趣旨や実践について共通理解を図ることができ，協力体制が確立された。

2 家庭との連携

食育講演会の実施

- ・6月28日(日)
- ・講師 東海大学教授 小澤治夫先生
- ・テーマ「早寝・早起き・朝ごはん・テレビを止めて外遊び」

・参加者 800名(下妻中学校教職員・生徒・保護者，下妻小学校・上妻小学校・総上小学校関係者，食育担当者会議委員)

給食試食会等の実施

- ・下妻小学校 給食試食会 5月14日(木)
- ・上妻小学校 地元食材に親しむ会 7月2日(木)
- ・総上小学校 栄養教室 7月3日(金)

3 地域との連携

保護者を対象とした料理講習会の実施

- ・10月16日(金) 午前・午後の2回実施



完成した朝食メニュー



参加した保護者と食生活改善推進員

テーマ2 小中連携による食に関する指導法等の研究

- 1 発達段階に応じた食に関する指導全体計画の作成
食に関する指導を推進しながら加除訂正を加えている。

平成21年度下妻中学校 食に関する指導の全体計画

生徒の姿 積極的な参加がみられ、 はなはだ興味を持って取り組まれている。	下妻中学校 教育目標 自ら考え、判断し、その場にもよる行動の とれる生徒 —自主・自律・自立—	学習指導要領 食育基本法 食育推進基本計画 学校給食法
--	--	--------------------------------------

食に関する指導の目標

- ・食の重要性、食の喜び、楽しさの理解をする。(食の重要性)
- ・心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい「栄養や食の摂り方」を理解し、自ら管理していく能力を身につける。(心身の健康)
- ・正しい知識・情報に基づいて、食物の品質及び安全性等について自ら判断できる能力を身につける。(食品の選択)
- ・食物を大事にし、食物の生産等にかかわる人々への感謝の心を育てる。(感謝の心)
- ・食の文化や食を通じた人間関係形成能力を身につける。(社会的)
- ・各地域の風物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重する心をもつ。(食文化)

幼稚園 小学校	各学年の食に関する指導の目標		
	1年	2年	3年
幼稚園 小学校	・年少期の心身の成長と食生活のつながりに関心と理解を深める。 ・学校給食を通し、栄養に関心を持つ。	・中学生期の食生活のあり方が生活の調子を左右することを理解し、望ましい食習慣を身に付ける。 ・学校給食を通し、規律ある生活習慣を身に付ける。	・生活にわたって生き生きとした食生活を送るために、自らの食事を通して自己管理能力を身に付ける。 ・楽しい食事や給食活動を通して、豊かな心をもつ。

特別活動	1学期			2学期			3学期			
	学級活動及び給食の時間	有指導等	学校行事	学級活動及び給食の時間	有指導等	学校行事	学級活動及び給食の時間	有指導等	学校行事	
特別活動	・朝食の大切さを見直そう ・運動と栄養について(6年) ・バランスの良い食事について ・給食時間の過ごし方(給) ・給食時間の過ごし方を考えよう ・セレクト給食の実施	・朝食の大切さを見直そう ・運動と栄養について(6年) ・バランスの良い食事について ・給食時間の過ごし方(給) ・給食時間の過ごし方を考えよう ・セレクト給食の実施	・学校給食週刊、学校保健委員会	・生活習慣病を予防しよう(1年) ・日本食を見直し良さを知らそう ・健康の食生活(給) ・日本食生活について考えよう ・セレクト給食の実施						

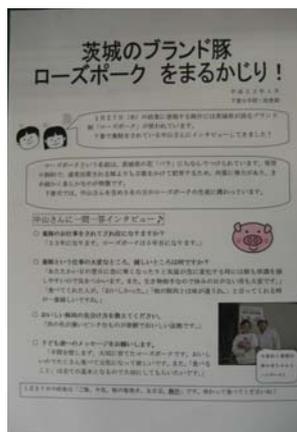
総合学習
・食育だより、保健だより、学校保健委員会、献食会、講演会、しもつ食育ネットワーク
・家庭・地域との連携
・家庭・地域との連携により、食育の推進を行う。地域全体で食育に取り組む。
・地域の自然、食文化、産業等についての理解を深め、生産者や生産過程を知ることによって食への感謝の気持ちを育てる。
・対話・定期研修、保護者の申し出、日本の食生活の継承から食育推進が必要と認められた場合は、関係機関と連携し、協力の上、校内外の指導体制をつくる。
・生徒の食生活の現状を踏まえ、生活習慣病の予防の観点から個別に相談指導を行う。

〈食に関する全体指導計画・中学校〉

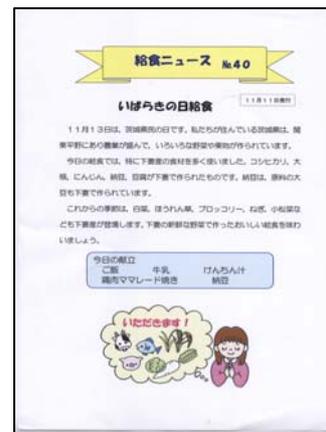
- 2 協力校における食に関する指導全体計画の作成
食に関する指導を推進しながら加除訂正を加えている。
- 3 発達段階に応じた食に関する資料集の作成
食に関する指導を推進しながら資料の整備にあたっている。



〈栄養カレンダー〉



〈旬の食材ニュース〉



〈給食ニュース〉

- 4 発達段階に応じた食育の指導法の研究
栄養教諭連絡会を毎月第1・第3火曜日に実施し、指導方法の研究にあたっている。

テーマ3

学校における食に関する指導推進の取組

- 1 推進校の食に関する指導全体計画の見直し
食に関する指導を推進しながら加除訂正を加えている。
 - 2 給食の時間における給食指導の充実
茨城県学校給食研究推進校（豊加美小学校）と連携し、給食指導の在り方について研究を深めている。
保健体育課指導主事訪問兼下妻市教育委員会指導課指導主事訪問
・第1回 5月25日(月)
・第2回 10月21日(水)
 - 3 教科や領域を活用した食に関する指導の取組
実践中心校・実践協力校において、家庭科や特別活動の学習に栄養教諭が入って、TTで指導にあたっている。
- ねらい
各教科や学級活動等において、食に関する指導目標を明確にした授業を行うことにより、食に関する正しい知識の定着と自己管理能力の育成を図る。

○ 実践例

- ・生活科「とうもろこしのふしぎ」（小2年）
給食に使用するとうもろこしの皮むき体験を通して、生産者の苦勞と作物栽培について学習する。
- ・学級活動「かみかみパワーを見つけよう」（小4年）
よくかんで食べると身体に良いことがたくさんあることに気づき、すすんでよく噛んで食べるようにこころがける。
- ・学級活動「骨こつ貯めるコツをみつけよう」（中1年）
成長期に必要な栄養や食事について考えることで自分の食生活を見直し、生活習慣の改善を図る。



〈小2・生活科〉



〈中1・学級活動〉

4 教材・教具の開発

食に関する指導を実践する中で、栄養教諭と各学校の指導者が連携して児童生徒の実態にあった教材・教具の開発にあたっている。



〈はしの持ち方〉



〈下妻食材マップ〉

5 食育つうしんの発行

各学期毎に「食育つうしん」を発行している。また、保護者を対象とした料理講習会においては特別号を発行し啓発に努めている。

テーマ1～3に共通する具体的計画

- 1 食に関するアンケートの実施
食に関するアンケート調査を5月と12月に実施し変容を確認した。
- 2 食育情報の共有
ICTを活用し、食育に関する情報を市内小中学校が共有できるようにした。
- 3 栄養教諭と担任との連携
食に関する指導について連携を図ることで、教職員の理解が深まった。
- 4 実生活と結びつけた食育の推進
給食試食会、栄養教室、料理講習会等を実施することで、学んだことを家庭生活に生かすことができた。
- 5 食育指導の協力体制の確立
栄養教諭を中核とした食育を推進することで、市全体にネットワークが構築された。

数字で変化のあった事項について

- 食生活に関する調査を行い、児童、生徒、保護者の食に関する意識や実態の変容を調査した。
- 対象 下妻中学区内小学校5・6年生(470名)、下妻中学校全生徒(605名)、小学5・6年生保護者及び中学2年生保護者(587名)
- 児童

No.	項目	21年5月	21年12月	比較
1	学校がある日に毎日朝食を食べる。	92.4%	92.9%	↗
2	休日にいつも朝食を食べる。	76.0%	82.0%	↗
3	学校で食事について勉強している。	80.4%	81.1%	↗
4	学校での食育を家の人に話す。	83.0%	82.5%	↘
5	三食必ず食べるようにこころがける。	92.8%	95.8%	↗
6	栄養バランスを心がけて食べる。	82.8%	89.2%	↗

- 生徒

No.	項目	21年5月	21年12月	比較
1	学校がある日に、毎日朝食を食べる。	87.4%	90.2%	↗
2	休日にいつも朝食を食べる。	62.2%	56.0%	↘
3	学校で食事について勉強している。	53.3%	81.6%	↗
4	学校での食育を家の人に話す。	49.8%	47.8%	↘
5	三食必ず食べるようにこころがける。	91.4%	93.5%	↗
6	栄養バランスを心がけて食べる。	66.5%	74.1%	↗
7	朝食に主食とおかず2品以上食べている。	23.6%	31.3%	↗

- 保護者

No.	項目	21年5月	21年12月	比較
1	三食必ず食べるよう指導している。	91.4%	95.5%	↗
2	栄養バランスを考えて食べるよう指導している。	84.9%	88.9%	↗
3	食事のあいさつを指導している。	87.8%	89.9%	↗
4	食に関する学習会や講習会に参加したことがある。	35.4%	41.6%	↗
5	学校からの給食関係資料を読んでいる。	90.8%	92.6%	↗

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 下妻中学校区食育推進担当者会議を設置し、地域の保護者、PTA、各種関連団体等協力しながら取り組んだことにより、地域での食育推進のためのネットワークが構築され保護者の食への関心を高めることができた。
- 小中の栄養教諭と担任が連携し、発達段階に応じた食に関する指導内容の検討を行ったことにより、教職員の食に関する指導への理解も深まり、給食の時間や教科における指導も充実してきた。
- 食育の推進のために、食に関する指導の全体計画や年間計画を見直したことで、学校給食を活用した指導や教科等において計画的に取り組むことができた。校内の食に関する指導が充実してきたことで、子ども達の食生活や健康への意識の向上が見られるようになってきた。また、食育つうしん等による情報発信や関係機関と連携した広報活動等により、家庭や地域での食育の啓発につながった。

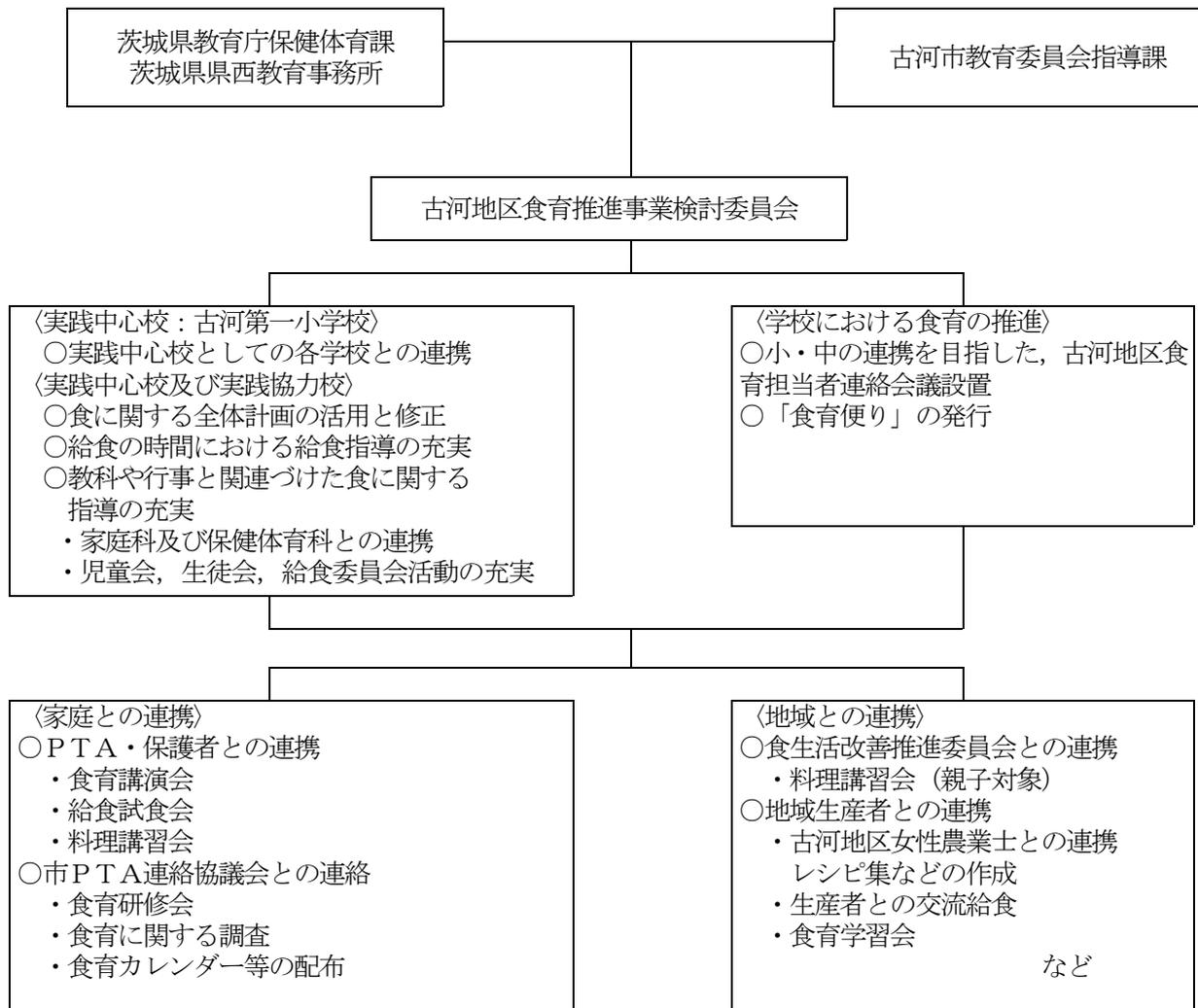
今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 下妻中学校区の取組を下妻市内の他中学校区に広めていく。また、食に関する指導法や資料を市内共有ネットワークに掲載する。
- 各校の実態に配慮した食に関する指導の研究を行い、子どもの心身の健康を育んでいく。
- 食育を推進するためには、家庭、地域とさらに連携した取組が必要となってくる。今回のネットワークを今後も活用しながら、地域と一体となった食育を推進していく。

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	茨城県
推進地域名	古河市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 学校における食に関する指導推進の取り組み

- 食に関する「全体指導計画」を基本にした実践と見直し
 - 食育推進委員会の設置により、校内の協力体制及び指導体制を整備し、「食」はすべての教育の基礎であるとの共通理解を図り、指導の充実を推進した。
- 給食の時間における給食指導の充実
 - 食べ物を大切にする心の育成を図る授業の実践
 - 児童が給食が作られる行程を理解することをおして、調理員の給食に対する思いや願いについて触れ、自分たちの食を支えてくれる方々に感謝する心を育てる。また、感謝して食べることで、さらに残さないで食べようとする気持ちを育成した。



3 教科や行事を中心とした食に関する指導の取り組み

- ・ 生徒の活動を前面に出した委員会活動との連携

○中学校においては、委員会活動の停滞が課題となっている。ある中学校においては、保健委員会と給食委員会の生徒が各クラスを訪問して、「試合に勝つための食事とは」というテーマで発表を行った。これまでは、年1回程度の取り組みであったが、回数を増やすことで、生徒の意識の高揚を図ることができた。



【親子で楽しい試食会】

4 家庭との連携

- ・ 給食試食会の実施

○親子料理教室の実施

〈ねらい〉

児童や保護者が食生活改善推進協議会の皆さんの指導を受けながら料理作りに取り組みすることで、食に対する意識を向上させるとともに、望ましい食生活や食習慣の形成を図る。

〈メニュー〉

キラキラ☆オムライス 中華サラダとおしゃれトマト

わかめスープ フルーツヨーグルト

〈参加者の声〉

- ・ 子どもたちの自主性を尊重して分かりやすく指導していただいた。
- ・ 包丁の正しい持ち方などを丁寧に指導していただきよかった。
- ・ 野菜が苦手だったが、チキンライスに野菜ジュースを入れるアイデアがよく、子どもも喜んで食べていた。
- ・ 親子で一緒に野菜を切ったり調理できて楽しかった

参加者アンケートでは、「今後もこういった食育の行事に参加したい」が92%であった。実習後、「家庭でも実践したいメニューがある」の質問についても92%が「ある」と回答し、家庭での実践につながってきた。



【親子で取り組む『食育カルタ』】

テーマ2 学校における食育の効果을上げるための保護者や地域との連携のあり方の研究

1 古河地区食育推進事業検討委員会の設置

- ・ 学校、保護者、関係行政機関、食生活改善推進員、地域生産者の協力体制を整備し、健全な食生活の充実に図る。

2 PTA、保護者との連携

- ・ 「学校から地域へ」、「学校から家庭へ」、「地域から学校へ」、「家庭から学校へ」のサイクルを生かした連携の強化
- 各種配布物の作成（実践中心校）

〈ねらい〉

「食育だより」・「今日のたべものニュース」などの各種配布物による、食に関する情報提供を実施することにより、連携の強化を図る。

〈内容〉

① 「食育だより」の作成

保護者を対象にした、食育に関する情報発信をする。

食育に関する行事の紹介、アンケート調査の結果報告などを中心に発行する。

② 「今日のたべものニュース」

児童・保護者を対象とした、給食献立に焦点をあてた情報発信をする。

地場産物・郷土料理・旬の食材や、食育の知識などの内容を中心に発行する。

家庭からのご意見欄を設けて、「家庭から学校へ」・「学校から家庭へ」の情報交換として利用、連携を図る。

〈取り組みの様子〉

・ 「これからもこういったお便りを続けて欲しい」や、「毎回楽しみにしている」といった肯定的な声が数多く寄せられるようになった。

・ 保護者からの給食レシピの要望やご意見への返答など、栄養教諭との交流が生まれるようになってきた。レシピの提供は、家庭での実践にもつながってきた。

○食育講演会への参加

対象：古河市内小中学校教員（学校長，健康安全教育部員，給食主任，養護教諭等）
食育推進事業検討委員
推進地域PTA役員等

〈ねらい〉

学校における食育推進体制の整備を行うために，地域の保護者や学校関係者が一堂に会し，食に関わる専門家の公園を聞くことを通して，学校・家庭・地域が連携して食育を推進し，児童生徒の望ましい食生活の育成を図る。

〈内容〉

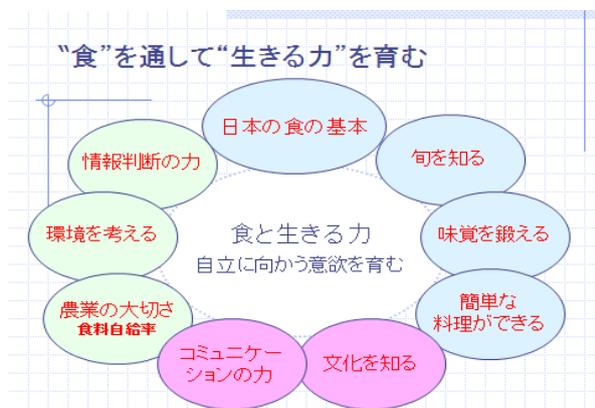
- ・講師 食育コーディネーター 大村直巳先生
- ・演題 「現代っ子と食育」～食の空間が子どもの心を育む～

〈講演の趣旨〉

- ・消費社会と食環境と子ども
- ・「食の基本」3つのポイント
 - ① 主食と主菜と副菜（日本の食の文法）
「ごはんと一汁二菜」の日本型の食べ方
 - ② 地産地消，旬産旬消
 - ③ 食べ物への感謝の気持ち
（「いただきます」のころ）
- ・学校，地域，家庭，行政が連携して



【古河市食育講演会】



【第2回食育推進検討委員会資料】



【検討委員会の様子】

〈第2回食育推進検討委員会の開催〉

第2回目の食育推進検討委員会は，講演会終了後，講師の大村先生を囲んで実施した。先生が講演で強調なされた，「食を通して生きる力を育むことは，自立に向かう子どもたちの意欲を育むこと。」を中心に，委員それぞれの立場から感想や発言があり，ねらいに即した有意義な時間を過ごすことができた。

3 地域との連携

- ・食育リーダーである食生活改善推進員による，保護者を対象とした「食育料理講習会」の開催

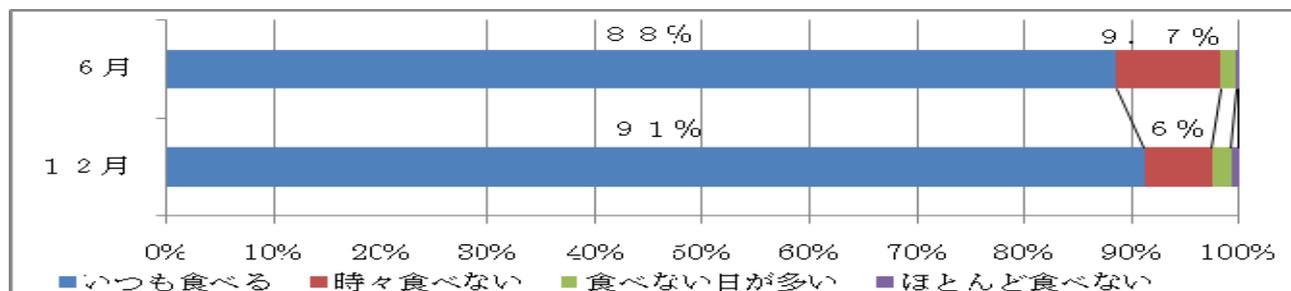
4 地域・生産者との連携

- ・古河地区女性農業士，古河地区野菜生産部等との連携
- ・交流給食の実施

数字で変化のあった事項について

実践中心校のアンケート調査をもとに、児童の変容について把握し、検討委員会の話合いの材料にするとともに、今後の指針としたものを挙げる。

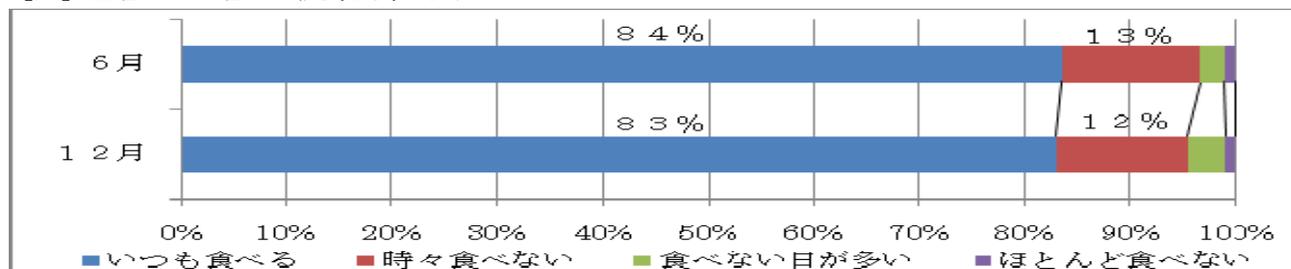
【問】学校がある日は朝食をたべますか？



○ 朝食摂取については、88%→91%が毎日食べると回答している。

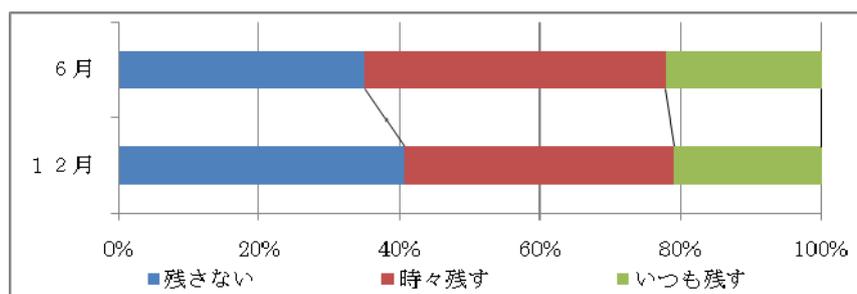
朝食摂取によって、体に目覚めのスイッチが入る。午前中の活動をスムーズに行うために不可欠であるので、今後も朝食の大切さについて指導を続けていきたい。

【問】土曜日・日曜日は朝食を食べますか？



○ 休日については、平日よりも起床時間が遅くなって、朝食と昼食が一緒になってしまうことから、平日よりも食べないときが多くなる傾向にある。児童だけでなく、家庭に朝食摂取の大切さを呼びかけていく必要性を感じる。

【問】学校の給食を残すことがありますか？



○今年度になり、食育の取り組みの成果があらわれてきたようで減少の傾向にある。成長期に必要な食材や、苦手とする和食なども残さずに食べられるように、今後の指導を工夫していきたい。

研究中心校において6月に調査した「朝食摂取状況」においては88%の児童が「いつも食べる」という回答であった。

欠食の理由については、

- ・食欲がない
- ・朝起きるのがおそいので食べる時間がない
- ・太りたくない
- ・食事が用意されていない

等の理由があげられている。

この結果については、右にあるような「食育通信」等で紹介し、家庭への協力を要請してきた。

その後の12月調査においては、91%に向上してきているが、このような取り組みの成果がうかがえる。

古河第一小学校 平成20年 7月号

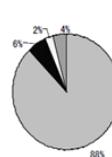
食育通信

今回は、5月に実施しました食育に関する実態調査の結果についてお知らせいたします。朝食の摂取状況と、朝ごはんの効用について特集します。

「早寝・早起き・朝ごはん」のすすめ

朝食は脳や体を目覚めさせて、朝から元気に活動するための大切な食事です。食欲や時間がないからといっておろそかにすると、成長期の体に悪影響をおよぼします。また生活習慣病をまねくこととなります。

児童のみなさんの朝ごはんについてアンケートをとりました。



(問)学校がある日に朝ごはんを食べますか？

- 毎日食べる……88%
- 週に1～2日食べない……6%
- 週に3～4日食べない……2%
- ほとんど食べない……4%

(問)食べない人にお聞きします。食べない理由は何ですか？

- 1位 食欲がない
- 2位 朝起きるのがおそいので食べる時間がない
- 3位 太りたくない
- 4位 食事が用意されていない

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

○栄養教諭が中核となり研究を進めてきたが、卓越した知識と実践により、他の小中学校での取組が積極的になり、学校における食の指導が充実してきた。また、学校連絡会の組織として、給食主任・研究主任・家庭科主任・養護教諭と様々な立場から選出したため、教科や行事の活性化にも寄与することができた。

○本研究において組織した食育推進事業検討委員会による協力によって、「学校から地域へ」、「学校から家庭へ」、「地域から学校へ」、「家庭から学校へ」のサイクルを意識した研究の方向性に生かすことができた。これらは、研究センター校である古河第一小学校が配布している「今日のたべものニュース」に家庭からのご意見欄を設けたことで効果をあげた。児童が家庭に帰った時の話題として「食に関すること」が増えたという報告もあった。

○親子料理教室等の実践の中で、食生活改善推進員の協力を得ることにより、児童生徒及び保護者の食に関する関心が高まるとともに、食材の活用や調理法についての理解が深まり、食育カレンダーの配布をとおして、家庭での実践へと繋がっている。また、今までは中学校において活動の場がなかったが、検討委員の横の連携により、小学校及び中学校のPTAが連携した「PTA教育講演会」が実現できた。食育の大切さを、旬の素材を生かしたヘルシーメニューの試食も兼ね、体験しながら学ぶ場作りに広がりを見せた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

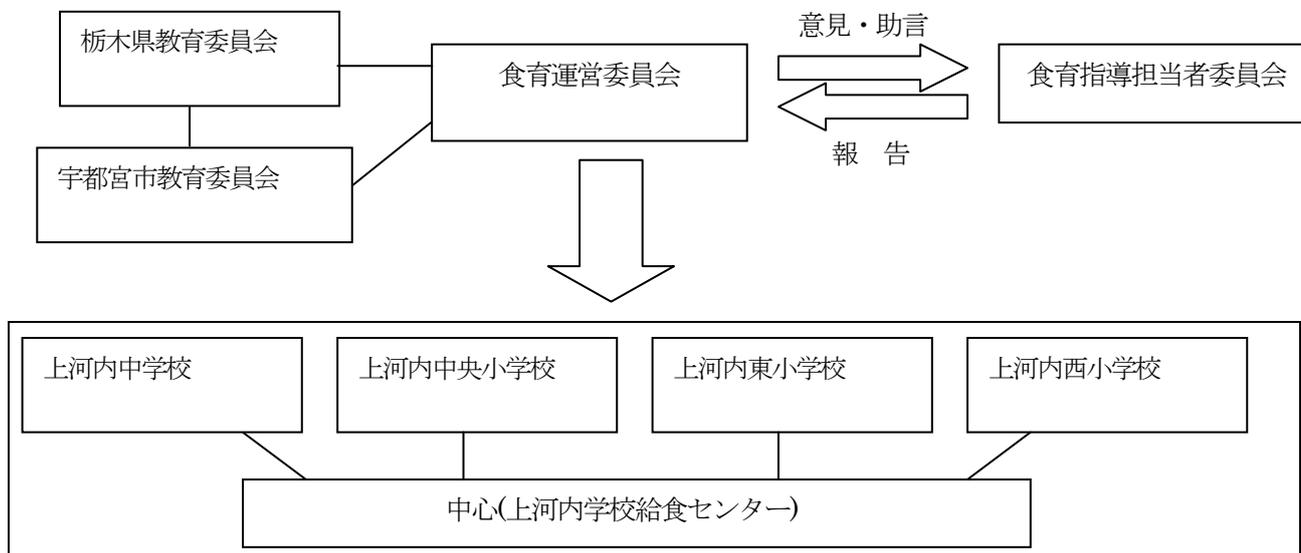
○古河市の小中学校は32校である。推進地域5校での取組であったため、本研究を広く浸透させるための研究組織のあり方、研究の方法を継続的に考えていく。

○健康を保持、推進する食生活の創造にあり方を考えていく必要がある。栄養教諭がすべてを担うことは困難であるため、教職員がさらに関心をもって食育に取り組む手立てを確立させていく。そのためには、幼小中の連携等、系統付けた指導を構築していく必要性が浮き彫りとなった。

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	栃木県
推進地域名	宇都宮市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科等における食に関する指導の充実のための取組



栄養教諭，学校給食センターの学校栄養職員，各小中学校の学校栄養士業務嘱託員（市費嘱託員栄養士）等が参画した「食に関する指導年間指導計画」を作成し，家庭科や学級活動などの食育に関する授業を各小中学校で計画的に実施することができた。



「小学生によるお弁当コンクール」を上河内地域学校園内の小学校 3 校で実施した。

ねらい：栄養バランス
旬の地域の食材の使用
60 分以内にお弁当の作成
内容：調理計画表による審査
実技審査



中学生が総合的な学習の時間に，地域の生産者からじゃがいもの栽培の方法を教えてもらう体験活動を取り入れた。また，収穫したじゃがいもを活用した給食のレシピコンクールを開催し，優秀作品を地域学校園の小学校の給食に提供し，小中学生の交流を深めた。

テーマ2

学校給食を通じた食に関する指導の充実のための取組



給食を提供して下さる生産者や JA の方との交流会を定期的を実施した。このことにより給食で使用する地域食材の品数が増えるとともに生産者等に学校で取り組む食育について啓発することができた。



食物アレルギーを有する子どもの保護者、学校長、学校給食センターの学校栄養職員、各小中学校の学校栄養士業務嘱託員（市費嘱託員栄養士）等が話し合いをもち、除去食、代替食などできる限りの対応を実施した。

テーマ3

学校と家庭との連携による食に関する指導の充実のための取組



親子料理教室を開催することを通して、家庭で簡単にできる調理実習を行い、子どもたちの調理への関心を高めることができた。また、保護者も子どもと調理する楽しさを味わい、家庭でも実践したいとの感想が寄せられた。

内容：炊飯ジャーで作るピラフ・かぼちゃとおからのドーナツ・ゴーヤジュース



給食センターで古くなった釜を利用して、給食調理の体験活動を実施した。子どもたちからは、「料理をするのに、こんなに力が必要な作業だと思わなかった。」「皆んなの給食を作るのは、大変なことですね。」などと、調理員の苦勞を知るとともに調理員に対する感謝の気持ちへとつなげることができた。

数字で変化のあった事項について

1 食生活実態調査結果から見てきた傾向について

(1) 調査概要

○ 目的

上河内地域の各校児童・生徒の食生活の実態を把握し、給食センターを中心とした食育推進に生かす。

○ 調査方法 アンケート調査

○ 調査対象 <小学校>上河内地域の小学校3校の4～6年生児童

<中学校>平成20年度：上河内中の1～3年生の抽出

平成21年度：上河内中全生徒

(内訳) 平成20年度 小学校

(人)	4年	5年	6年	計
6月	86	88	99	273
1月	87	90	99	276

中学校

(人)	1年	2年	3年	計
6月	28	28	35	91
1月	26	27	35	88

平成21年度 小学校

(人)	4年	5年	6年	計
6月	76	85	88	249
1月	73	86	87	246

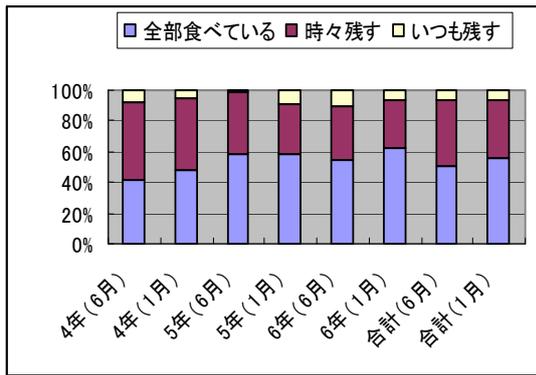
中学校

(人)	1年	2年	3年	計
6月	93	91	88	272
1月	88	90	85	263

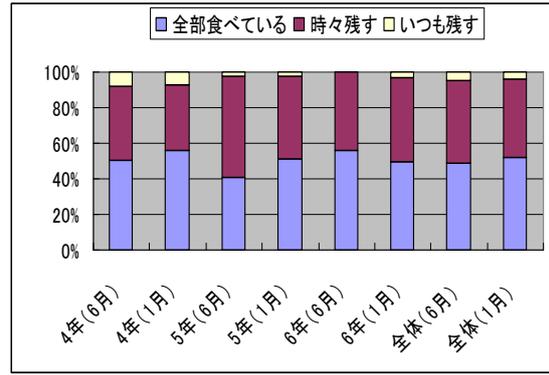
○ 調査時期 平成20年6月、平成21年1月・6月、平成22年1月の4回実施

(2) 調査結果と考察

(2) -① 学校給食は全部食べていますか。



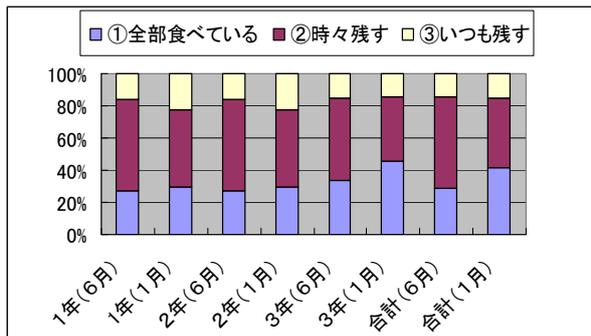
平成20年度



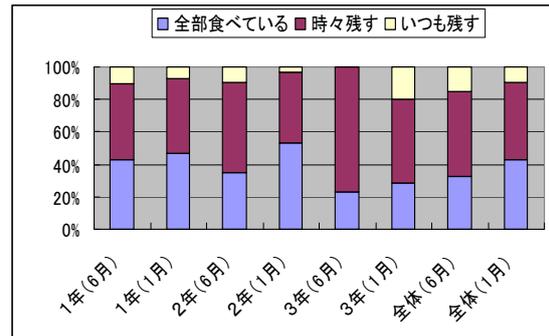
平成21年度

【小学校】

平成21年度の6月と1月を比較すると、6年生を除いて、「全部食べている」と答えた児童が、4・5年生の平均では、48.6%から52%に増加し、時々残す児童が減りつつあります。20年度と比較してみると毎日の給食時の指導や校内放送などを実施した結果、給食を残さずきちんと食べようとする意識が向上したと考えられる。また「いつも残す」と答えた児童の割合は、僅かながら減少傾向にあるものの、継続して取り組む必要がある。



平成20年度

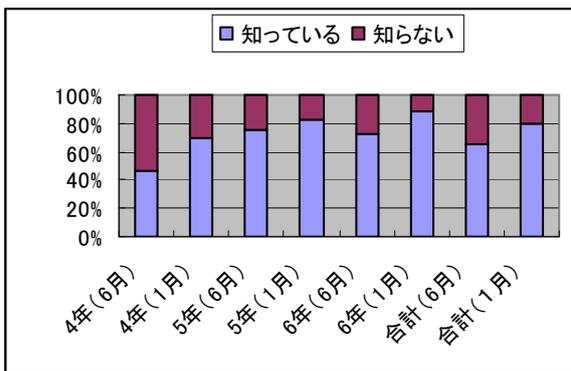


平成21年度

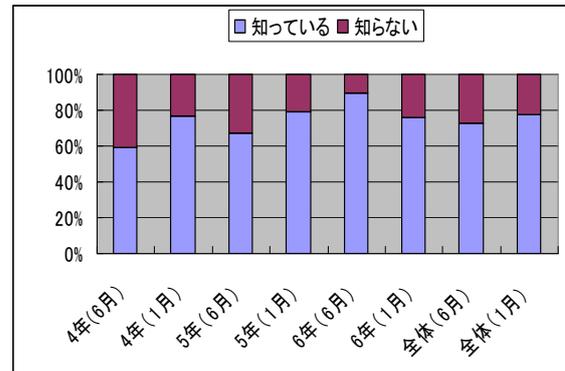
【中学校】

中学生においては、平成20年度からいつも残すという生徒の割合が少なく、時々残すと答えた生徒が減少してきている。結果的に平成21年度では、全部食べている生徒の割合が増えてきた。毎日の給食指導、一口メモ、校内放送を実施した結果、成長期の栄養やバランス、自分の食生活を理解し改善しようという生徒が増えたと思われる。しかし、少食や強い偏食を示す生徒には今後個別指導などを行うことや、食事の重要性について引き続き理解を深めさせる必要がある。

(2) -② 上河内でたくさん作られている農産物にはどんなものがあるか知っていますか。



平成20年度



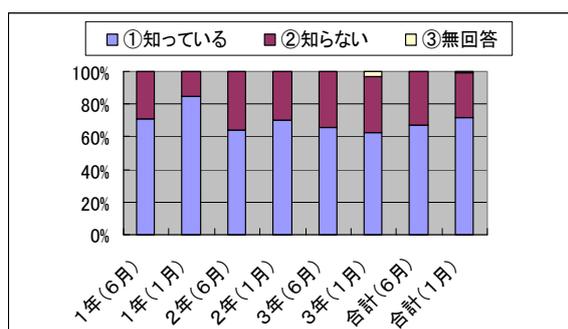
平成21年度

【小学校】

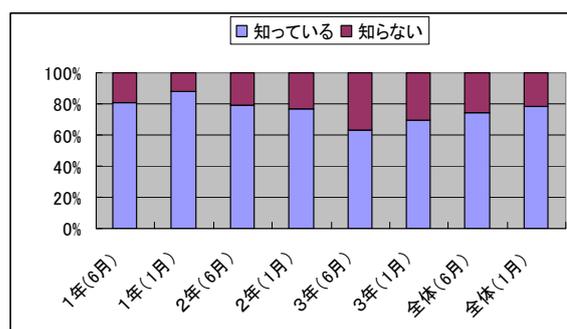
平成20年度の回答では、上河内地域で作られている農作物については、「知っている」と回答した児童の割合が、6月が65%から1月には80%に増加した。また、上河内の農産物は何かという別の問いには、6月に比べ、1月には多くの農産物を挙げるようになっていく。

平成21年度は、「知っている」と回答した児童が72%から77%に増加した。代表的ないちご、ゆず、米の回答がほとんどであった。しかし、中には学校給食で使用した白菜やじゃがいもなどの回答もあり、家庭への啓発としての食育だよりの配布等、給食センター・学校・家庭の連携により、地域への理解を深め地域のことを知ろうとする児童が増えた結果につながった。

今後とも地場産物の食材を活用した献立を増やすとともに、食材への関心・意欲を高めるためにも農業体験学習や教科等で収穫した食材を給食で使用したり、交流給食を実施したりするなど、各教科等と学校給食を関連させた取組を実施する必要がある。



平成20年度



平成21年度

【中学校】

中学生も平成20年度6月に比べて、1月には「知っている」と答えた生徒の割合が増加し平成21年度の1月には78%が「知っている」と答えた。こうしたことから、生徒が考案した献立を取り入れることや総合的な学習の時間でじゃがいもの栽培、収穫し、給食メニュー作りと一体とした体験的な学習と上河内地域の食文化や食にかかわる歴史等を踏まえた、授業等と連携した指導が効果的であった。また、小学校から段階的に「地産地消」の意味や具体的内容を指導し、小・中の連携した教育をすることで、地域社会での取り組みを高めていくことが必要である。

2 地域内地場産物使用について

平成20年11月地場産物使用割合25% → 平成21年11月地場産物使用割合32%

(算出方法：地場産品数÷食品数)

平成19年度 11品目 使用量 655kg → 平成21年度 26品目 使用量4851kg

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・ 栄養教諭、学校給食センターの学校栄養職員、各小中学校の学校栄養士業務嘱託員（市費嘱託員栄養士）等が参画した「食に関する指導年間指導計画」を作成することで、食育の継続的・計画的な実施につながる。
- ・ 生産者、JA等との交流会を実施することで、学校給食における地産地消率が増加した。
- ・ 生産者等との体験活動や地域農産物を活用した給食を実施することにより、地域農産物の関心が高まるとともに、残食が減少した。
- ・ 親子料理教室を開催することにより、保護者の食への関心が高まるとともに、親子のコミュニケーションが増えた。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- ・ 小中学校9年間を見通した体制作りの必要性
- ・ 家庭との連携が必要であることから、学校給食を柱とした食育だよりの試食会、親子料理講習会などの啓発活動の計画的な実施方法